

2 弥生終末から古墳初頭にかけての土器

弥生土器とあわせて弥生終末、古式土師器の出土が少量出土している。以下、図示した資料について述べることとする。(第208図の60～64)

甕(60) 体部が丸みのある折返し口縁の甕で、口縁部に単節斜縄文が施される。

甕(61) 口縁部に段をもち、丸みのある体部の甕である。赤井戸式系の古式土師器と考えられる。

甕(62) S字状口縁甕の口縁から体部上半部の破片である。口縁は体部に比べ小さい、やや細い条痕が外面に施される。

甕(63) 丸みのある平縁口縁の甕で、器面は刷毛目を強く残している。

器台(64) 脚部に3孔をもつ、脚部は縦方向に篋磨きされる。

古式土師器の
様相

以上、図示した土器について述べたが、60は赤城山南麓に分布をもつ赤井戸系、埼玉県西北部に分布をもつ吉ヶ谷式系の甕と考えられる。口縁部が段をもつ61もその系譜につらなる甕であろう。62、63、64は古式土師器である。62はS字状口縁甕で、口径が体部に比較して小さく古式土師器のなかで後出する特徴を示している。62、63はC軽石層の上からの出土である。

赤井戸式系、吉ヶ谷式系の土器、および古式土師器は、弥生集落の終えん、古墳集落の成立を知るうえで貴重な土器である。特に弥生土器と古式土師器は大きな相違があり、その分析、検討は本遺跡における弥生から古墳にかけての変容、しいては本県での古墳社会成立を知るうえで大きな問題となるところである。現状では本遺跡における弥生終末の様相は不明確にある。この解明にあたっては今後の調査、遺構、遺物の検討を慎重に進める必要があろう。

第7節 日高遺跡をめぐる水田跡

1 日高遺跡発見の意義

昭和51年12月、関越自動車道(新潟線)建設事業に伴う日高遺跡の発掘調査によって発見された水田跡が、箱根以北における初めての弥生水田跡として報道されたことにより、全国的により注目を集めるところとなった。

従来、弥生水田跡の発見は、歴史的著名な静岡県登呂遺跡を始めとして、福岡県板付遺跡、岡山県津島遺跡、滋賀県大津ノ湖南遺跡、静岡県山木遺跡など全国的に10数か所に知られていたが、登呂遺跡をのぞいてその実態は不明確の段階にあったといえる。登呂遺跡は昭和22年から25年にかけて、日本考古学協会により関連諸科学の協力のもとに、総合的調査、研究された遺跡であるが、一枚の水田面積が約1,200～1,800㎡に及ぶため、水田として機能するのか疑問視される面があった。日高遺跡における一枚の水田面積が90～120㎡ほどの小規模に区画された水田跡の発見は、弥生水田を考える上で大いに注目されることとなった。

日高遺跡発見の後、昭和53年、北九州地方の福岡県板付遺跡における縄文晩期終末に位置付けられる夜臼式土器を出土する水田跡。昭和55年、佐賀県唐津市菜畑遺跡から晩期後半の山ノ寺式土器を出土する水田跡と、縄文晩期までさかのぼる水田跡が発見され、初期の段階から完成された農耕技術がもたら

されていることが明らかとなった。また我が国における水稻農耕の起源と弥生文化の成立について再検討の必要が生じるところとなった。

水田跡の発見は、弥生後期の小区画水田を検出した岡山県百間川遺跡、弥生前期から中期初頭にかけての方形小区画水田を広範囲に検出した滋賀県服部遺跡など発見例を増し、昭和56年には、東北地方北部の青森県南津軽郡田舎館村垂柳遺跡で、田舎館期段階の水田跡の発見があり、弥生中期の段階には、すでに寒冷地の東北地方北部まで高度な稲作農耕の技術が伝わっていたことが明らかとなった。

現在、水田跡の発見は全国的な広がりみせるところとなったが、日高遺跡における小区画水田の発見は、従来の弥生水田跡についての知見をあらためる上で先駆的役割を果たしたところにある。

2 遺跡周辺の水田遺跡

日高遺跡は、榛名山南東斜面に発達した火山性山麓扇状地の扇端部から流出する湧水によって生成、堆積した黒色粘質土を利用して水田を営んでいる。本遺跡の発見は、浅間火山を給源とする浅間C軽石層に覆われたため、良好な遺存状態で検出された。この浅間C軽石は初期古墳、古式土師器との関連で四世紀中葉に降下したと考えられるものである。したがって、この浅間C軽石層下に検出された水田跡はそれ以前のものとなる。

この浅間C軽石層下の水田跡は現在のところ、日高遺跡を始めとして、高崎市小八木町小八木遺跡、井野川両岸に検出された高崎市大八木町熊野堂遺跡⁽²⁸⁾、同浜川町御布呂遺跡⁽²⁹⁾、同浜川町芦田貝戸遺跡⁽³¹⁾、群馬郡群馬町同道遺跡⁽³²⁾などが知られている。以下、その概要を述べ、まとめることとしたい。

小八木遺跡

小八木遺跡は、高崎市小八木町にある。日高遺跡の西方約1.2km、榛名山南東斜面に発達した相馬ヶ原扇状地端部に形成された谷地内の西側低地に水田跡の検出をみている。

本遺跡は、昭和53、54年圃場整備事業に伴い高崎市教育委員会によって調査された。浅間C軽石層、B軽石層に覆われた2面の水田面を検出している。浅間C軽石層下の水田は、日高遺跡と同様、谷地頭部からの湧水を水源として水田を営んだものと推定される。幅広い太畦に区画された水田面はその一枚が50m²前後の大きさで、地形に制約されるため不定形を呈している。水田面を区画する畦は幅40～50cm、幅広いもので1.0mの規模があり、木杭で畦を補強している部分もある。出土遺物は後期前半位置づけられる樽式土器が出土しており、日高遺跡とほぼ同時期の後期前半に水田造成が行われたことが示している。

なお水田跡北西の傾斜地には、溝に浅間C軽石の堆積がみられる畝状遺構を検出している。遺跡地北の弥生後期住居跡を検出した正観寺遺跡とかかわりが考えられる水田跡である。

熊野堂遺跡

本遺跡は高崎市大八木町熊野堂にある。上越新幹線建設事業にかかわり、昭和53年、群馬県教育委員会が調査を行っている。榛名山南東斜面より流れる井野川左岸に立地する。本遺跡の調査によって、榛名二ツ岳火山灰層(F A)、および浅間C軽石層下の水田跡2面を検出している。特にF A下の水田跡は小区画の古墳水田跡の発見として大いに注目を集めた。

遺跡は水田跡の検出された谷地部分と、北側の住居跡を検出した台地部分からなる。南側は井野川によって水田が削られている。水田調査面積は約2,200㎡である。F A 浅間C 軽石層下の水田は、現地地表下約1.2mにあり、台地縁辺では25～50㎡ほどの不整の長、正方形呈するやや大きな区画と、谷地部分では幅広の長い畦によって長形状に区画されたなかを、さらに1.0～8.0㎡ほどの、ほぼ長方形に近い小区画に区切った形態を示している。水田土壌は青黒色泥炭質の土壌である。また多くの足跡と鋤の痕跡列がある。プラントオパール分析の結果、水田耕作が行われ、また水田面における透水実験の結果、保水性が良好とのことである。

御布呂遺跡

本遺跡は高崎市浜川町字御布呂にある。昭和54年、高崎市立運動公園建設に伴う調査として高崎市教育委員会が実施した。F A 井野川右岸段丘にある本遺跡の調査によって、浅間C 軽石層下、榛名二ツ岳火山灰層（F A）、（F P）下の3面の水田跡を検出している。

浅間C 軽石層下の水田跡は、現地地表下約2.1mにある。水田面は5,500㎡、約200枚の水田面を明らかとした。水田面は平坦部分では40㎡前後の整然とした長方形を呈するが、傾斜地では地形に合わせるために、不正形な台形、三角形状を呈している。水路は幅60～120cm。5～15cmほどの畦畔を伴う水路、及び畦畔を伴わない水路2本を検出している。土壌は黒色粘質土である。遺物に畦畔内に2本の杭、数片の樽式土器破片が出土した。

芦田貝戸遺跡

本遺跡は高崎市浜川町芦田貝戸にある。公共施設建設に伴う調査として高崎市教育委員会が実施した。遺跡は御布呂遺跡に近接して井野川右岸の段丘上に位置する。調査によって浅間C 軽石層、榛名二ツ岳火山灰層（F A）、浅間B 軽石層下の3面の水田跡と榛名二ツ岳火山灰層（F A）下の畝状遺構を検出している。浅間C 軽石層下の水田跡は、現地地表2m下に検出されたもので、I 区、III 区で36面の水田面を調査、面積の得られる14枚の水田面は約30～40㎡ほどの長方形を呈している。耕作土壌は泥炭質の黒色粘質土である。

同道遺跡

本遺跡は群馬郡群馬町大字井出字同道にある。県立高崎北高校の建設に伴い、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が調査を行った。井野川中流域の左岸に位置する本遺跡では浅間C 軽石層、榛名二ツ岳火山灰層（F A）、（F P）、浅間B 軽石層下のI～IV期の4面の水田跡を検出している。浅間C 軽石層下の同道I 期水田跡では約9,000㎡の広さに、180面ほどを検出した。F A 水田の一面は30㎡前後で、長方形を呈している。出土遺物として後期後半の樽式土器、古式土師器の高坏脚部が出土している。I 期水田は弥生時代後期から開始され、浅間C 軽石の降下によって埋没する時点、つまり古墳時代初頭まで継続したことを意味しているとした。

以上、高崎市周辺地域に検出された浅間C 軽石下の水田跡の概要について述べた。これらの水田跡のなかで、小八木遺跡、日高遺跡は、いわゆる谷地田の形態を示し、谷地頭部から流出する湧水によって水田が営まれたことがうかがわれる。調査によって水路を中心に弥生後期前半から後半に及ぶ多くの弥生土器の出土があり、弥生後期の樽式土器を使用する集団によって本水田の開発と営田が行われたこと

を示している。

高崎市周辺地域は、その北西に榛名山東南麓に形成、発達して相馬ヶ原扇状地形が広がり、その扇端部より流出する小河川によって多くの低湿地帯が存在している。日高遺跡の周辺にも弥生水田が営まれた中央谷地の低湿地帯ほかに、数条の低湿地帯の存在が明らかとなった。小八木遺跡の水田跡も同様にこの低湿地帯に営まれたものである。小八木遺跡の北に位置する正観寺遺跡においても数条の泥炭質の低湿地帯が認められる。また高崎市井野町井野天神遺跡では、井野川に注ぐ小谷の低地に、現地地表下約1.2mほどにアシ等の累積した黒色粘土層が、認められ、その中に加工された板材、木材に付着、また介在して樽式土器破片が多く出土している。低湿地帯を開田した水田跡存在の可能性も考えられよう。

高崎市周辺地域における弥生中期後半から後期にかけての遺跡は、自然堤防、微高地上に多くの分布がみられるが、それに隣接する低地には多くの低湿地帯が存在したものと考えられる。この低湿地帯は弥生中期後半から後期にかけての水稻農耕を営む上で最も適した湿田土壌であったものと考えている。

井野川中流域に沿って検出された熊野堂、御布呂、芦田貝戸、同道遺跡は、河川縁辺へ帯状に堆積した黒色粘質土を利用して水田が営まれている。このなかで一面の水田面積1.0～8.0㎡の長方形小区画水田の形態を示す熊野堂遺跡を除いて、基本的には長方形の水田形態を示している。その田面積も30～40㎡ほどで、水田検出面積も御布呂遺跡では調査面積5,500㎡、同道遺跡では9,000㎡に及んでいる。水田跡の広がり、さらに広範囲に及ぶものと推定される。近接するこれらの水田跡は相互の関連がうかがわれ、井野川縁辺に沿って大規模に水田が営まれたものと考えられる。出土遺物は同道遺跡において後期後半の樽式土器、古式土師器と考えられる高坏脚部などのわずかな土器の出土が知られているにすぎず、日高、小八木遺跡にみられる谷地水田と比べ、出土遺物に時間差があり、また営田形態、その規模等、相違が指摘できる。これらの水田が樽式土器を使用する集団によって営まれたものか、あるいは古式土師器を使用する集団によって営まれたものか、浅間C軽石の降下にかかわる水田跡の終えんと合わせて、今後、解明すべき大きな課題である。

第8節 日高遺跡と周辺の弥生遺跡

日高遺跡の位置する高崎市は関東平野の最深部に位置し、東を旧利根川の流路にあたる広瀬川低地帯と、西を烏川に挟まれた高崎、前橋台地上にある。北西は、榛名山東南麓に発達した相馬ヶ原扇状地形が広がりみせているが、この扇状地には井野川、染谷川、八幡川などの河川が谷を刻み東南流している。これら河川は高崎、前橋台地上に至り、多くの帯状に延びる自然堤防、自然堤防状の微高地を形成、発達させている。弥生中期後半から後期にかけての遺跡は、この自然堤防、自然堤防状の微高地に多く分布を示していることがうかがわれる。(第210図)

1 中期弥生集落の出現とその展開

日高遺跡の位置する高崎市周辺地域において、弥生文化の本格的な波及、成立は、弥生中期後半の段階にある。

中期後半の遺跡は、竜見町式土器を出土する遺跡として烏川、井野川、染谷川などの河川によって形成、発達した自然堤防上、低台地上に遺跡分布が知られるようになる。